

# 思ひ草

第15号

平成26(2014)年12月5日 発行

## 「心を耕す」道徳 ～手を当てる教師に～

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



このコラムで、嘗て「心の耕し」について述べました。それは学校教育課程上、道徳に該当します。道徳の時間は、それ自体固有の「目標」を持っています。だが、道徳は「子ども理解」という点でも、興味深いものがあります。そこで私は、授業参観日に全学級で道徳の授業を行うことを、提案しています。

意地の悪い狐は、丸太ん棒の橋の上で通せん坊。だが、心優しい熊さんは、一人一人抱えては対岸に渡してくれました。これは、小学校1年生の「一本橋」という道徳教材です。

ある学校での子どもたちの反応は、「悪い狐は焼いちまえ」「パーベキューにする」など、稚拙なものでした。これらは、今風の劇画的で、短絡的な発想の発言と言えます。先生は、授業後の懇談会で、保護者にすかさず訴え、考えてもらいました。

中学校も小学校と同様に、「生徒理解」の点で、道徳は興味深いものがあります。「涙がちよちょ切れる」。これが、飢餓状態の中で、出ないお乳に吸い付いているアフリカの赤ちゃんの映像を流した後の、クラスのリーダー格の生徒の発言でした。

彼を責めているわけではありません。心を開いて、素直に自分の気持ちを表せないでいる、彼の心情が気になるのです。

ある中学校の道徳の研究授業では、授業の最初から最後まで寝たふりをしている生徒がいました。しかし、「かたくなに受け入れをガードしている彼が、本当は一番、授業に参加していたのかもしれない」と講評したところ、日頃の彼を知る教師曰く、「その通りです」と。中学校でも生徒の心を引き出せば、感極まって泣き出す生徒や価値を巡って主張し合う生徒も出ます。

今、子どもたちは、少なくとも何かに飢えているのです。道徳の授業を通して、私たちに訴えかけているのです。

「生命尊重」に取り組んだ中学校で、飼育していた子ウサギを自分たちの不注意で殺してしまったと職員室で泣きじゃくる生徒たちがいました。子どもの本質は変わっていないのです。

本学部の「教育の前に、人間開発あり」の教育テーマの一つは、「心の手当てのできる」指導者です。本学部生には、心に手を当てることのできる教師になってもらいたいと願います。

## 『活私開公』

人間開発学部教授 やすの いさお 安野 功



先日、足立区のある小学校の校長先生から、お褒めの言葉を頂戴した。校内研修の講師に招かれ、社会科の研究授業の指導に当たったときのことである。

「実は、いま、國學院大學人間開発学部初等教育学科の学生さんが教育実習に来ています。先ほどの研究授業と協議会にも参加していました。彼は2年生のときから、教育ボランティアとして私の学校に来ています。頑張っていますよ。どの子にも慕われ先生方からの信頼も厚いので、教育実習生受け入れの際、区の教育委員会に彼のことを逆指名しました。國學院大學では、素晴らしい学生を育てていますね。」

学生たちの努力や頑張りが認められたときには、自分ごとのように嬉しいものである。

学生たちの頑張りと言えば、今年の教員採用試験でも嬉しいことが続いた。

大学推薦を受け、横浜市教員採用試験を受験したある学生が、1384名中第1位。2次試験を最高の成績で合格したのである。北海道短期大学より編入学した学生の中で、初めて札幌市教員採用試験に合格という快挙を成し遂げた学生もいる。その学生

は東京都の教員採用試験にも合格したのである。

こうした学生たちの頑張りや快挙を褒め讃えるには、どんな言葉が相応しいのだろうか。

『活私開公』…これだ。東京大学の伊東乾氏の造語である。

自分を活かすことが、同時に、公共社会に貢献することにもなる。その逆に、公(みんな)のために頑張ることが、同時に、自分を活かすことにもなる。『滅私奉公』に対する言葉である。

教育ボランティアで頑張った学生は、ボランティア先の学校の子どもたちのために尽くした日々の努力の結果が最終的には自分に跳ね返ってきた。教員採用試験に全力で挑み見事に合格した2人の学生は、自分の夢を叶えただけでなく、『推薦した本学の信頼を高める』とともに、後輩の学生たちに対して、『國學院大学で頑張れば力のある教員になれる』という希望と勇気を与えてくれたのである。大学にとっても名誉である。

“頑張る学生を応援する”國學院大學人間開発学部。そこに秘められた真の願いは、一人ひとりの頑張りが、“自分のため”だけでなく“みんな(公)のため”にもなるという『活私開公』の精神ではないだろうか。

## 教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

### 教育実習 学校現場での実習から多くのことを学びました

#### 教育実習での気づきを確かなものに

人間開発学部 教授 藤田 和也

教育実習というと、50年近く前の我が学生時代の教育実習体験を今もなお印象深く思い出します。授業を通して高校生たちと交わることの楽しさと充実感が、教師になろう！という意志をより強固なものにしたことを覚えている。ただ、50年前の淡い記憶は、楽しさと充実感だけが残っていて、そこで何に気づき、何が身に付いたのかについての記憶は定かではない。

さながら、50年後の今、実習生を送り出し、ひとまわり成長して戻って来る彼らを迎える立場となってみると、教育実習体験を通して少なくとも次のような点への気づきをより確かなものにして、これからの教師への道を歩んでほしいと強く願っている。

一つは、教育実習での最も重要な体験は、授業実施体験であることは間違いない。授業案(指導案)を書き、授業実施を試みる。指導担当の先生からは、授業案の段階でいろいろと指摘を受け、ときには何度か書き直しを求められる。さらに、授業の実施後にはその進め方にかかわって少なくとも注意や指摘を受ける。この過程が実習生にとってとても重要であるが、これらを通して自分の教材解釈と授業力量の足りなさを痛感させられるに違いない。それを単なる痛感にとどめず、その不十分なところがどこであるかをはっきりさせ、それを埋める努力に是非つないでほしい。その努力を惜しまない姿勢が教員としての重要な資質だと思う。

二つには、授業や授業外での生徒との交わりを通して、生徒を理解し、生徒との信頼関係を紡ぐことの重要性を身をもって感じ取ったに違いない。日々これを感じ取り大事にする姿勢も、教員の資質を左右する。楽しさと充実感を感じながら、その内実としての一人ひとりの生徒をそれぞれなりに理解することの重要性を忘れないでほしい。

三つは、教育実習を通して教師という仕事の全体像が、その大変さと重要さの再認識を伴って、見えてきたはずである。その発見と再認識に照らして、今の自分には何が足りなくて何が向いているのかを吟味しながら、不足を補い、あるいはさらに伸ばす努力も惜しまないでほしい。

#### 教育実習 ～体験的に学ぶことから～

初等教育学科 3年 田屋 裕貴

私は、母校である神奈川県相模原市立陽光台小学校で教育実習を行いました。担当学年は5年生で、先生方からも児童からも多くのことを学び、充実した4週間を過ごすことが出来ました。

今回一番感じたことは、子どもたち一人ひとりを理解するということの難しさと大切さでした。私は、子どもを理解しようとする気持ちを持って教育実習に臨みました。しかし、この当たり前のことが実は難しく、学校生活のあらゆる場面で大切であることを学びました。これを特に感じたのが、研究授業を行った時でした。研究授業では、一方的に話して授業を進める時間が多くなり、それに対する子どもの反応にも上手く対応することが出来ませんでした。

研究授業の後には、先生方に様々な指導をしていただきました。その中で、印象的だったことが、授業の中でも子どもを理解していくことが大切であるということです。具体的には、授業中に机間指導を行って、子どもたちの様子を理解するということでした。子どもが分からない所について教師と1対1でかかわれる場を作ることができるということも学びました。

次の授業では机間指導をして、出来ているところは褒め、つまづいているところは考え方を聞いて支援するなど、授業中になるべく関わりを持つようにしました。すると、以前より子どもたちの反応や挙手する人数が増え、子どもたちの反応を理解し対応することが出来ました。子どもたち一人ひとりと関わることで、子どもがなぜそのような反応をするのかが理解でき、子どもの反応から展開していく子ども主体の授業に変わっていききました。この様々な変化に私は喜びを感じました。

実習では多くの失敗があり、そこから成長することが出来ました。またそこに喜びを感じ教師という仕事を目指す気持ちも強まりました。私はこの体験的な学びを大切にしたいので、ボランティアを続けるつもりです。今回の様々な経験を忘れずに、これからも常に学ぶ姿勢を持って、子どものために努力し続ける教師を目指していきたいと思えます。

## 教育インターンシップ

### 今年も「実践体験型実習」をテーマに学びます

初等教育学科、健康体育学科、子ども支援学科の3学科の学生の教育インターンシップの活動も終盤に入ってきました。12月12日(金)に行われる第2回教育インターンシップ連絡協議会は、学生の報告会も兼ねて行う予定です。子どもとの交流から深めた学びについて報告できることと思います。

### 百聞は一見に如かず

健康体育学科 2年 西村 潤也

私は今年、教師になるための新たな一歩を踏み出した。実際に、あざみ野中学校という学校現場に行き、自らの目で見て肌で感じる事が教師を志すうえで非常に大事だと考えたからだ。そこには、ここに書き記しきれないほど多くの発見と学びがあった。

主に体育の授業や部活動、特別支援学級の補助をやらせていただいている。体育祭や合唱祭のお手伝いも経験させていただいた。当たり前ではあるが、様々なタイプの生徒がいた。クラスのムードメーカーや勉強が得意な子、スポーツが好きなお子や歌が好きなお子など、個性があふれるのが学校である。多くの生徒と関わっていく中で気づいたことがあった。それは、生徒一人ひとりのよさを見つけることでみんなが学校という舞台の主役になれるということだ。特に印象に残っている生徒がいる。その生徒は、なかなか人の注意を聞き入れない所があり、学校行事にも参加しづらい、そんな子だった。だが、その生徒は、部活動になると誰よりも必死に取り組んでいた。私は、感心し、「何かに全力で取り組むことはカッコいいことだぞ。」と彼に伝えずにはいられなかった。翌週、その生徒の教室を覗いてみると、見違えるほど真面目に授業に取り組む彼の姿がそこにあった。

人のよくない部分は意識しなくても見えてしまう。しかしながら、よさの発見というのはそれなりの工夫やちょっとした努力が必要だと思う。たった週一度という短い期間ではあるが、そのような実際に経験しなければわからない「おもしろさ」を感じながら成長していきたいと思う。

### 教育インターンシップを経験して

子ども支援学科 2年 堀尾 拓哉

私は教育インターンシップを経験して、園での子どもたちの生活や保育士の子どもへの関わり方など、様々な経験をさせていただくことができた。

今まで学校では「子どもとの接し方」や「子どもに寄り添って子どもと同じ目線になる」ことなどを学んできた。しかし、現場では学校で学んだことのように上手に保育をすることができなかった。教育インターンシップで一番私が考えさせられたのは、子どもへの言葉がけである。教育インターンシップに行く前は、子どもに「どうして片付けなければならないの」といわれたら「もうすぐお昼ご飯の時間だからだよ」と答えるなど様々なシミュレーションをしていた。しかし、保育園ではまったくシミュレーションのようにはいかなかった。話しかけてくれる子は1人ではなく3人4人と複数だった。しかも話の内容はみんな違う。1人の子と話をしても、横からほかの子どもが話しかけてくる。大勢の子どもに同じことを言っても、それぞれに受け取り方が違うため、それぞれが違うことをしてしまった。そのことから、子どもには「わかり易く、短く、笑顔で」話さなければいけないと気づいた。

また、食事のときに、私は主菜、副菜の順番に食べていくことが体によく、食事のマナーとしてよいのではないのかと思い、実践をしていた。すると一緒に食べていた子どもたちが、「何で先生はそんな食べ方をしているの。一緒にやってみよう。」とみんな私のまねをし始めた。そのとき、私はこの食べ方が正しいのか急に不安になってしまった。このことから、保育士は子どものモデルとなるように、細かなルールやマナーを身につけておかなければいけないと思った。

教育インターンシップで子どもたちと触れ合うことで、座学で学習した理論のみならず、実践の場で保育を学ぶことができた。また、保育士が子どもたちのことを一番に考え、言葉がけや環境構成などに多くの時間を費やし、子どもにとってより良い環境を常に考えていることを身をもって感じた。

私は、教育インターンシップ先の園で、教育ボランティアとして活動を継続させていただく。これからももっと経験を増やして、子どもたちと同じ視線に立ち、子どもの発達を支えられる保育士になれるように日々精進していきたい。



## 教育実践総合センター夏季教育講座

### 「幼保小の連携実践フォーラム」を開催しました

8月30日(土)、たまプラーザキャンパスにおいて、「國學院大学幼保小の連携実践フォーラム」を開催しました。「学びと育ちをつなぐ『幼保小の連携』」をテーマに、講演、問題提起と討論の分科会、鼎談を行いました。

はじめに、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領を読み解く」をテーマに文部科学省初等中等教育局幼児教育課幼児教育調査官湯川秀樹先生にご講演いただきました。



分科会では、東京都、栃木県、横浜市の地域の幼稚園、保育園、小学校からの問題提起をもとに活発に討議が行われました。

また、鼎談では、コーディネーターの神長美津子先生、登壇者の津金美智子先生(文部科学省初等中等教育局視学官)、嶋田弘之先生(草加市立高砂小学校教頭)のもと、「育ちと学びをつなぐ幼保小の連携」のテーマにかかわる内容を深めたお話を聞くことが出来ました。

## 共育フェスティバル

### 地域の子どもたちとのかかわりから学んでいます

10月26日(日)、人間開発学部第6回「共育フェスティバル」を開催しました。「共育フェスティバル」は、大学・学生と地域住民が触れ合うイベントを開催することを通して、地域との連携の充実を目指しています。

当日は、学生企画委員の協力のもと企画運営を行い、およそ1200名の地域の方々にご参加いただきました。「学び」と「遊び」をテーマに企画した26種の体験教室は、多くの参加者でにぎわい、学生にとっても、子どもたちと関わり交流することを通し、3学科の特色を生かしながら実践的に学ぶことができました。

